

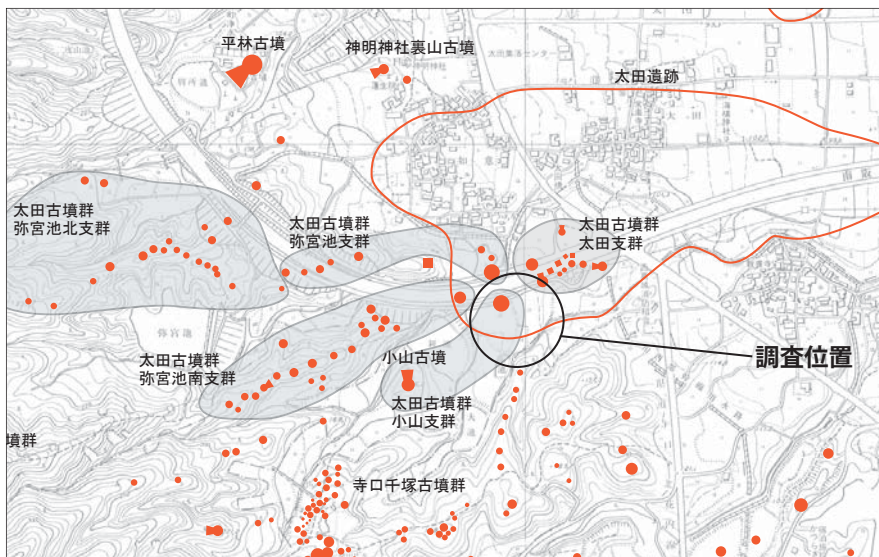
太田古墳群

—現地説明会資料—



4号墳 横穴式石室（両袖式）：全長 14.4 m 7世紀初頭～前半
円墳：直径 23 m 周堀 幅4～5m
凝灰岩製組み合わせ式家形石棺：幅 1.3m 長さ 2.1 m

葛城市教育委員会

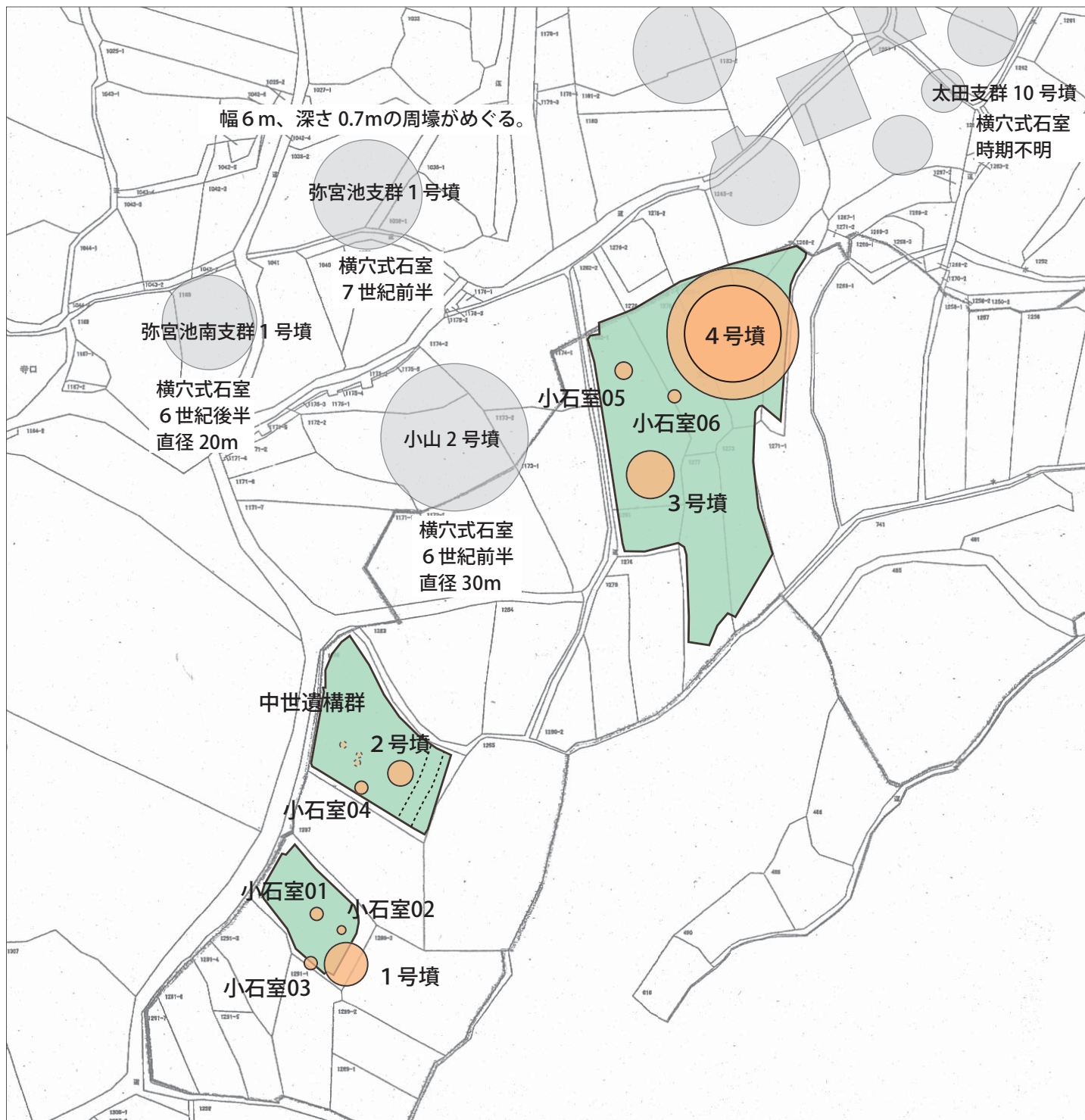


太田古墳群

太田古墳群は、小山・弥宮池・弥宮池南・弥宮池北・太田の各支群からなる古墳群です。

周辺では、小山支群 2 号墳、弥宮池支群 1 号墳、弥宮池南支群 1 号墳など、横穴式石室をもつ直径 20 ~ 30 m の古墳が確認されています。

調査位置図



遺構配置図



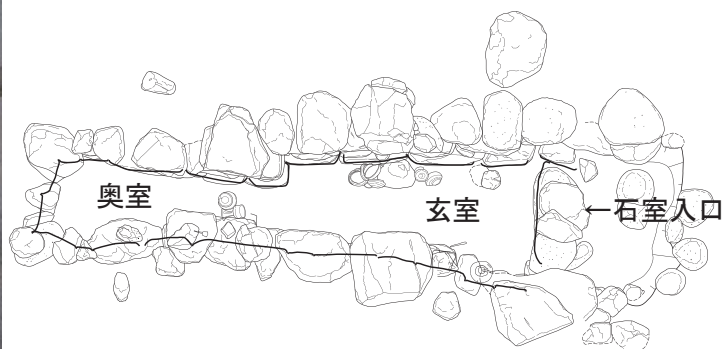
1号墳 横穴式石室（両袖式）全長 8.1 m 6 世紀後半



金銅製耳環
1号墳出土遺物



2号墳 横穴式石室（無袖式）全長4m 6 世紀中葉



2号墳 平面図



3号墳 横穴式石室（片袖式）残長 5.7 m 6 世紀後半



六獸形鏡（直径 11 cm）

4号墳出土遺物



小石室 05 遺物出土状況



金銅製耳環

はじめに

葛城市教育委員会では、新「道の駅」建設にともない、2013年より試掘調査を実施してまいりました。試掘調査の結果、遺構の確認された場所に対して2014年10月より本調査を実施し、古墳4基、小石室6基のほか、中世の遺構を検出いたしました。今回、その成果の一部をご紹介します。

古墳

古墳は、中世以降近世までの間で土地の開墾などによって大きく破損しています。

いずれも横穴式石室をもつもので、現在のところ6世紀中葉から7世紀にかけて築造されたと考えられます。

1号墳では、7世紀中葉にかけて横穴式石室の床面を造り直しながら、2～3回の再利用がされていることがわかりました。

2号墳は、無袖式の横穴式石室に奥室が伴う非常に珍しい形をしていました。定型化した横穴式石室が普及しはじめる頃にあらわれた、特殊な例のひとつとしてとらえることができます。

3号墳は、そのほとんどが破壊されている状態でしたが、凝灰岩製の組み合わせ式家形石棺をもつ古墳であったことがわかりました。

4号墳は、墳丘に外護列石、周堀に石積みを施すなど、古墳群の中の古墳としては丁寧な造りがされていました。また、凝灰岩製の組み合わせ式家形石棺をもち、鏡（六獣形鏡）や馬具といった副葬品をもつことなどから、4号墳は太田古墳群の中でも、有力な人物の墓であったことが想像されます。

小石室

古墳の傍に小石室を築く例は、葛城市内では三ツ塚古墳群などでもみられます。過去におこなわれた太田古墳群の調査においても、小石室は確認されています。

今回の調査では、充実した副葬品をもつ小石室も検出されています。今後このような石室の性格を考える上で、重要な役割を果たすものと考えられます。

中世遺構

中世の遺構は、溝や性格不明の土坑などを検出しています。近接する太田遺跡の調査においても中世の遺構が検出されており、当時この地域を支配下においていた万歳（まんざい）氏との関係が考察されています。

しかし、今回の調査で検出した遺構の例は、これまでの調査ではみつかっておらず同一視できるものではありません。遺構の性格の決定も含めて、今後の検討課題です。

まとめ

今回の調査で、太田古墳群でこれまで知られてこなかった古墳の姿などが明らかになりました。これらの古墳の被葬者像について、具体的な氏族などは明らかではありませんが、太田川流域の肥沃な土地を利用した米作などの農業生産力や、竹内越などの交通路を利用して勢力を高めた在地有力者の存在が浮かび上がってきます。今後、調査で明らかになった事実の検討や、出土遺物の整理を進め、地域の歴史の一端を明らかにしていきたいと考えております。